
始まりと終わりの子守唄

Ceez

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりと終わりの子守唄

【Nコード】

N6690T

【作者名】

Ceez

【あらすじ】

難病の治療法を待つ為コールドスリープに入ったあたしこと柚^ゆ木果狩遥^{ずきがかりはるか}がある日突然目覚めてしまったら、枕元には可愛い赤ん坊が二人！ 世界は裏返しにはなってるわ、人外種族も増えてるわ、オマケにあたしまで不老不死になってるわ！ どーなってんの、これ！？（見切り発車の為何にも考えてません）

ブローグ

そは始まりの種族

そして汝は全ての起源を統べる者なり

そは終わりの種族

そして汝は全ての終焉を司る者なり

対の種族はお互いを見詰め合う鏡の如く、反発する磁力の如く、
支え、対立し、高めあつて行く

双方を纏め導く神子みこの存在を軸として

……などと言う上の地の文とは全く関係の無い、青く青く何処までも青い地球の空にある日亀裂が入った。

当然目ざとい暇人が空を見ていてソレに気づき、あろう事が珍光景として動画サイトに投稿した。

そんな非常識な事がある訳無いと空を見上げた人々も、その亀裂に気付いて騒然となった。

そして当然のように何処から出ているかも分からぬ予算が組まれ、専門家チームが集められてその観測に没頭した。

しばらく経ってからのその専門家チームからのコメント、

——『亀裂が大きくなっている』

に、世界中の終末信論者が沸いた。騒いだ。お祭りだ！！

それに便乗した一部の過激派が大騒ぎを敢行する中、亀裂が砕け散った。

ぱりーん！ と空の一部に割れた窓ガラスのように大穴が空き、そこから緑色の空が姿を現した。

無論姿を現したのはソレだけではない。空の一面をこっそり削り取り向こう側が姿を現すと同時に、人の様で人で無い者達も姿を現した。

剣や槍を持ち鎧を身に纏った者達は、人間の有無など関係なく二つの陣営に分かれ互いに争い合っていた。

双方の姿を見上げた人間達は希望と絶望が絢交ぜになった表情で呟いた。

「ハルマゲドン終末の戦争だ……」

空を飛び交い争う者達の背にははっきりと人間達と違う特徴があった。

黒い羽根か、白い翼かが……。

深刻な世界情勢とは裏腹に、ある施設に小さな小さな二つの影が落ちた。その二つは空が割れると同時に此方の世界に落ちてきたのだが、二つの陣営の戦の印象が強烈過ぎた為、誰にも気づかれる事は無かった。

その二つの影は、ある私有地の片隅にひっそりと造られたこじんまりとしたドーム状の建物に舞い降りた。舞い降りたと称するが、そんな生易しい表現で通じる物ではなく、盛大に天井をぶち抜いて中に転がり込んだ。建造物のガレキが散乱する中、「いやーまいったね、ハッハッハー」とでも言うような気安さで頭を掻く片方。「だめじゃん」と言うばかりな突っ込みを入れる片方。

正確に言おう。両方ともその姿は生後一ヶ月位の赤ん坊の姿をしていた。結果的に天井をぶち抜いたのは片方が二メートルはある黒い翼を背から生やした黒髪黒目の赤ん坊。当然の如く全裸だが男性器のシンボルは無し。糸目で突っ込みを入れたのは金髪碧眼の赤ん坊、背負うは巨大な右に同じく白い翼。こちらもシンボルは持っていない。

二人は狭い室内にも拘らず翼をいっぱいに広げると、ふわりと浮き上がった。翼は当然の如く室内の直径よりも大きいが、半分以上が壁をすり抜け外へ露出してしまっている。そんな摩訶不思議な現象を気にする者はここにはないので、二人の赤ん坊は薄暗い赤色

非常灯に照らされた室内を見渡してひとつの置物を見つけた。そもそこのドーム状の建物はその置物を保存する為に建っていて、まさか天井ぶち抜く侵入者がいるなんて誰も考えない。

その置物は上半分を透明な物質で覆われた、平たく言うとかプセルであった。中には特殊なジェルが満たされていて、中には女性が一人。表面は結露した水滴が、更に内部の温度が尋常では無い寒さの為凍結している。二人の赤ん坊は無防備にソレに近付き、てしてしと表面を叩く。熱さ寒さを感じないのかきゅっきゅっとガラスの表面を擦って霜を拭き取ると、中に入っている女性の顔を覗き込んだ。ショートボブの決して美女とも美少女とも言えない平凡な容姿の顔をじっと見て、無邪気な笑い声を上げた。

飽きないのか暫くじっと見つめていた二人は顔を見合わせて頷くと、カプセルの表面に手を付いて燃え上がった。燃え上がるといっても炎のような揺らめきが二人から発せられ、間にあるカプセルを包み込んで部屋中を所狭しと暴れ回った。一分か五分か室内をオレンジ色に満たした炎は消え去り、ついでにドームの壁も跡形も無くガレキも蒸発。しかし冷たい床には全裸の少女だけが残っていた。

少女を挟みこむような宙空に二人の赤ん坊が未だに浮いていて、互いの掌を向けていた。念じるように眉をひそめる二人の間に蛍の灯火が光ると、瞬く間に大きくなり何かの形を取る。やがて淡い煌きが硬質の質感に変わり、小さな水差しがそこに現れた。白い翼の赤ん坊がその水差しを手にとると、黒い翼の赤ん坊はおもむろに女性の口に手をつ込み下顎を掴んで下に引っ張った。ゴギユツ！と音がして不自然な形で開口する、そこへ水差しを突き刺した白い翼の赤ん坊。乱暴を通り越して両方ともムチャクチャである。

気道か食道かも分からぬ所に注ぎ込まれる水差しの中の液体。中が空っぽになると水差しは輪郭を滲ませて消えてしまった。二人は女性の顎を元に戻すと息の合った欠伸をしたのち、健やかな笑顔を

浮かべ体を丸くさせて女性の腹や胸の上ですやすやと眠りについた。

一連の騒動が集結してから女性が目覚めたのはその十分後。ついでにドームに異常を感じた私有地の者が駆けつけて来て、夕暮れの空に甲高い悲鳴があがった。

おはようございます

「し、信じられん。あれほど異常だらけだったカルテと比較しても、何の問題も無くなっている……」

「異常を聞いているのではありません。健康であれば問題無いではありませんか」

二枚のカルテを驚愕した表情で見つめ直す医者と、淡々とした声で怒っているらしいお婆さんの掛け合いを、あたしはぼけーっと見つめていた。

目が覚めたら全裸で外に居て、大挙して押し寄せて来た黒服の人達と顔合わせしてしまったあたしがとんでもない悲鳴を上げてしまったのは、当然の権利だよね！ うつつ、見られたー。もうお嫁に行けない……。

その後にはわらわらと湧いたメイドさんに捕らえられたあたしは病院服を着せられ、黒塗りの車にお婆さんと同乗して病院へ直行。各種検査を一通り受けて今に至る、と。

色々疑問は尽きないんだけど、とりあえず最大の質問は、あたしの病院服の肩を片手で摘み、黒白の翼を広げて空中に浮かぶ二人の赤ん坊でしょう。しかもこの診察室に来るまで出会った人達、患者とか看護婦とかがね。ぎょっとした顔でぶるぶる首を振ると、見なかった事にしようとかいう風にスタスタと早足で去って行った……。

ちよっとおおおっ！？ 誰かこの子達について相談させてよおおお！

んーむにゅ……。とか呟いた片方、金髪の子がちつちな手で肩を掴んでいた所からよじよじと登る。この場合は下る？ んで、肩から移動してあたしの胸の中にすっぽり収まる。すると片方だけでもあたしの身長を遥かに越える大きさを持つ翼がしゅるしゅると縮んだ。姿相応の小ささになった翼がちんまりと自己主張する。今度はもう片方の黒翼を持つ子も同じ様に移動して左胸側に収まる。

うおーかわええ、癒やされるう。……………じゃなくてっ！

は、危ない危ない危うくこの自然な可愛さにやられる所だった。気が付くと医者とお婆さんが目を丸くしてこっちを凝視していた。違います違いますよ、二人ともあたしの子じゃないんですよ。つか伴侶を持った覚えもなければ、翼を持つような子供を産んだ覚えもない。ついさっきまでコールドスリープ状態だったあたしに心当たりなんかないってーの！

「はい、姉さん。もうお医者様は用がないそうですから行きましよう」

「は、はあ……」

スタスタとやって来たお婆さんがあたしの腕を取って椅子から立たせると、ぐいぐい引っ張る。ちよっ、このお婆さんパワフル過ぎる。そのままあたしを診察室から少し離れた病室まで連れて行く。

疑問その二。さっきからこのお婆さん、あたしを『姉さん』と呼ぶのだ。その都度、事情を聞こうとするんだけど、怖い笑顔で口を封じられてしまうんだ。紫色の着物に白髪混じりの結った髪、柔和な顔立ちは優しいよりは凛々しいと言う印象に見える。似ている気はするけど、記憶にあるあたしの祖母とは全然別人だし、なんでそんな呼び方をするんだろう？

押し込まれた部屋には医療用のベッドは無く、ガランとした中に居たのは数人のメイドさんだ。わーっとあたしに群がったメイドさんは病院服を脱がすと着物を取り出し、テキパキと着付けを済ませていく。ちなみに脱いだ病院服には二人の子供がくっ付いたまま、翼を広げてもないのにプカプカ浮いている。一反木綿みたいしかし良く寝る赤ん坊だなあ、あたしが目覚めてからずっと寝てばかりいるけれど、御両親は心配していないんだろーか？

「あれ、この着物……？」

「姉さんが気に入ってた着物ですよ。さあ、時間がありませんからさっさと行きましょう」

紫陽花染めの薄い紫の着物はコールドスリープに入る前に祖母から送られた物だ。お婆さんに引つ張られる前に病院服から赤ん坊を引き離し、胸に抱え直す。ジト目であたしを見つめるお婆さん。あたしが悪いんかつ。

再び黒塗りの車に押し込まれて、慌ただしさも抜けたあたしはやっと疑問点が聞きたせるところだ。隣に座っていたお婆さんが、「さあ、何でも聞いて下さい」と言う顔をしていたからだ。何故かこのお婆さんの表情だけは読みやすい。

「えーと、それではお婆さんに聞きたい事が山積みなんですけれど……」

「まあ、お婆さんだなんて他人行儀な呼び方は止めて下さい。昔と同じく呼び捨てにしてください。結構ですよ。姉さん」

「いやいやいやいや流石に倍の倍以上歳の離れたお婆さんと呼び捨てなんて失礼でしょう。……ん？ 昔みたいに？」

あたしが首を捻つてると、うつかりしてたと呟いたお婆さんが、

苦笑しながら自分の額をぺしんと叩いた。ん、この仕草は覚えがあるわ。ええと、確かあたしの妹が良くやっていた……。

「ご自分の名前と年齢は覚えておいでですか姉さん？　今更ですけど自己紹介と参りましょう」

「ええと、はい。柚木果狩^{ゆずきがかり} 遥^{はるか}、十七歳です。宜しくお願いします」

「これはご丁寧にも。柚木果狩^{ゆずきがかり} 沙霧^{さぎり}、六十六歳です」

「ん？　沙霧？」

「ええ、昔みたいにさーちゃんとも。呼びやすいようにフランクな呼び方で結構ですよ」

悪戯が成功して満足した表情で沙霧と名乗ったお婆さんが……、ええっ！　沙霧っ！？

「沙霧？　沙霧ってさぎり？　さーちゃん！？」

「ええ、そして姉さんは数え年で六十七歳。つまりゴールドスリーブに入ってから五十年も経っているわ」

……さん、はいっ

「ええええええええええっ！？！」

初めまして

このお婆さんはやはりあたしの妹の沙霧であるらしい。二人でしか知り得ないマル秘情報をいっぱい知っていた、主にあたしの心痛のネタを……。他にも五十年の間に何の変化があったあの、最近の情勢だのを色々教えてくれた。

あたしこと柚木果狩遥は後天的な遺伝子障害（と言う説明だった）の為、中学に上がったばかりの頃からやたらと疲れやすくなり。酷い時には電池の切れた玩具のように、日常生活の中で倒れる事が多々あるようになった。もう最終的には睡眠時間が一日十八時間とかの猫生活に。医者も「最善を尽くします」しか言わなくなったので、その時の当主だった祖母の鶴の一声で、あたしは治療法を待つ為に延々と眠る羽目になりました。

でも、こうやって起きてるって事は治療法が出来たのかなあ？
気になったあたしは沙霧に聞いてみた。

「ね、ねえ、さーちゃん。あたしがこうやって起きてるってのはさー」

「ええ、残念ながら。姉さんの治療法はまだ確立されておりません」
「……はい？ え、じゃあ何であたし、ここにこうしているの？」
「いやいや待てマテ、もしかしてこれは夢？」

「落ち着いて下さい姉さん。順を追って説明しますから。ついでにその赤ん坊の事も」

そう言つて説明されたのは次元の壁をぶち破つて現れた、別次元の存在の人達だった。その人達は暫く人類の目の前で戦いをしていて、それを止めたと思つたら人類にコンタクトを求めて来たのだとか。

で、政府とかの国同士の会話は割と友好に済んで、問題になつたのが……。

「この子達？」

「はい。信じられないのですが、どうやら崇め奉^{たてまつ}られるような存在らしいですよ」

「だったら早い所、あたしから引き離して会わせてあげれば良いんじゃないの？ ほら、検査を受けている間だつて一日千秋の思いだつただろうし」

「出来ればもうやっていきます」

呑気なあたしの発言に沙霧はピシヤリと言いつつた。検査で病院を歩き回っている最中にも、柚木果狩家のSPさん達が果敢に挑戦していたらしいんだ。でも、近寄るだけならまだしもあたしから引き離そうとすると、掴む事すら出来ないんだつて。「コノヤロウ」
とか思つてアタックした人は、物凄い反発を受けて弾き飛ばされちゃったんだとか。道理で後ろから凄い音が聞こえ来たり、やたらと黒服の人達が疲弊してた訳だ。

凄^{ウチ}い音に後ろを気にしなかったのは薄情とか言わないように。柚木果狩家は後ろ暗い部分がある大きくて古い家だから、SPが付けられている時の対応マニュアルとかあるのよ、色々。言つてて悲しくなつてきたなあ、まったく。

「じゃあ直接届けてあげるしかないんじゃない？」

「この車がどこに向かっていると思つているとお思いですか。これ

からあちらの代表者と歓談の場が設けてあるんですよ」

「……あたしも一緒に？」

「その子達が姉さんから離れない限り、当たり前じゃありませんか」

そりゃそうだ。

代表者って事はお偉方と会うのか。えーと、えーと……。いかん、対応の仕方とかさっぱり忘れているね、うん。一族の中だと落ち零れだからなー、あたし。成績も中の下くらいだし、容姿も平凡だし、運動も病気のせいで出来なかったし。

そんなあたしが分家にも養子に出されず、本家で悠々と過ごしていられたのは祖母のお陰だ。若い頃から靈感に長けていたと言う祖母は、あたしが生まれた時に「この子は将来とんでもない事になる」と言ったらしく。その予言のお陰で本家での生存を許されていると言っ訳です、ハイ。

なんと言いますか、幼い頃に祖母から聞いた話だと、柚木果狩の一族に生まれた者は優秀な者が多く、そんな中で時折祖母みたいに妙な能力を持った子供が産まれてくるらしい。でもあたし自身何かの能力を持っている自覚も無く、妹は優秀だったし、両親には嫌みを言われたし、肩身が狭かったのも確かだ。

それでも祖母のお陰で病気の事で医者に匙投げられても、そのまま見放されずにコールドスリープなんて処置を取って貰えただけでも幸運なんだろう。でなきゃ今この場で五十年も時を越えて沙霧と会話が交わせるなんて無かったし。

「そういえば御婆様は？」

「もうとつくにお亡くなりになられていますよ。私達の両親も私が当主を受け継いだ頃に亡くなりました。今度お墓参りに行きましよう」

「うん、そうだね」

どちらかともなく車内がしんみりする。腕の中の赤ん坊達が唐突にむにゅむにゅ言いながら身じろぎしたので、少しずらして抱え直す。安心したのか、体を丸めてまた静かに寝息を立て始めた。

「未婚の母と言った感じですね。昔から小さい子に懷かれる癖は変わらないようで」

「癖って言うのかなこれ……？ 昔面倒見て上げた子達って、どうしてる？」

「皆それぞれ分家を纏める長老格になっていますよ。姉さんが目覚めたと聞いて、薬師寺家の蓉子が会いたがっていました。勿論、姉さんより遙かに年を食っていますが」

「蓉子ちゃんがかー。会う会う、コレが終わったら会うよ。美人さんになったのかなー」

「もはや美人を通り越していますけれどね……」

苦笑して「変わらない」と呟いた沙霧と顔を見合わせて笑い合う。車が途端にゆっくりとした動きになって、カーブを曲がり段差を越えて、静かに止まった。これは何処か目的地に付いたんだなと分かる。外から運転手さんがドアを開けてくれて、両手が塞がっているあたしは沙霧の手も借りて車から降りた。目の前に広がったのは綺麗な日本庭園を持つ一軒屋、の様相を呈した昔にも何度か見た事のある料亭だった。五十年経っても続いていたのね。築何年経っている事やら……。

入り口で女将さんに「ようこそお越しやす」と挨拶されてから中へ案内して貰う。あたしが抱いている赤ん坊二人に目を丸くしたけれど、ほんのちよつとで直ぐにこやかな表情に戻る。女将の鏡だね。『お相手の方もお待ちです』と通された座敷にその人達はいた。

片や、パンク系のテールロードジャケットやらレザーパンツやらに身を包み、座敷なのに土足で胡坐を掻いた真つ赤な髪のパイルド系白人的イケメン。やや雰囲気がおじさん臭い。お猪口を掲げながら「よう！ 先にやらして貰ってるぜ」と声を掛けてきた。それだけなら行儀の悪い人にしか見えないが、背中には巨大な黒い翼が十二枚も生えていた。

もう片方は鈴風の鳴りそうな雰囲気、煌びやかな印象を持つ短い金の髪のパイルド系イケメンお兄さん。白く輝く法衣と言わなければならない装束を身に纏い静かに正座している。こちらに目を向けると「ああ、神子連れてきてくれたんですね」と眩しい位の控えめな笑みを浮かべた。こちらにも背中からは白い翼が十二枚も生えている。

ああ、たしかにこの子達の身内ですね、これは。

変わりました

「俺は終族しゅうぞくの代表でサタンと言う。宜しく頼まア」

「私は始族しぞくの代表でルシフェルと申します。以後宜しくお願いします」

「柚木果狩遥ゆずきがりはるかです、宜しくお願い致します」

赤毛でワイルドなお兄さんはサタンと名乗り、優しそうだけどこちよつと堅物っぽいお兄さんはルシフェルと名乗った。赤ん坊を抱えているので不作法になっちゃうけど、あたしも自己紹介で軽く頭を下げた。沙霧はあたしを連れて来ただけで、別室に下がるそうだな。なんでも色々外に漏れるとマズい話とかがあるらしい。

「先ずはウチの坊ぼンが世話になったな。礼は言っておくぜ」

「始族からお礼を申し上げます。我等が神子が手を掛けさせてしまったようので申し訳ありません」

もんの凄い対照的な二人だなあ、この人達。サタンさんは喋っていても熱燗傾けているし、ルシフェルさんはお膳を出されているにも関わらず見向きもしてない。それにしても迎えってお兄さん達だけなのか？

「あのー？ この子達って御両親はいらっしゃらないのですか？」

二人は目を丸くしてから、納得するように苦笑した。サタンさんが頭をガリガリ掻きながら説明してくれる。

「ああ、わりいわりい。そうかこっちの人間には馴染みねえよな。」

坊ン達はな、厳密には親とかはいねえんだわ」

「神子様達は我等始族とサタン等終族の象徴とも言えるべき存在です。その寿命は永遠に続き、絶えるなどと言う事は有り得ません。只、時折古い肉体を捨て、新しい心身となつて生まれ変わるのです」

「ええと、じゃあこの子達、赤ん坊だけど成人なんですかー」

「見た目だけはな。中身は数億紀元以上の知識や経験が詰まった至上の存在だぜ。ちよつとでも育て方間違えると、こんな星なんざア……ボンツ！ と往くぜ」

「ええええつ！？」

「中身はそうだとしても心身、性格や心の在り方等は無に返されてしまいますから。また我等で一から育て上げる必要があります。その相談をしている最中に下部の方で諍いになり、全体的な戦闘に勃発したのはお恥ずかしいと言えませんが」

「じゃあ次元の壁抜いたつて言うのは、教育方針の行き違い？」

「そうなりますね」

「すまん」

涼しい顔で流すルシフェルさんと顔の前で手を立てて謝るサタンさん。義理堅いのかそうでないのか微妙な所。だからと言って、教育方針の行き違いから戦争で壁をぶち抜くつて、安普請のアパートか！ 言い方がすつげー軽すぎる……。

不意に腕の中の赤ん坊がふわりと浮かび上がつて、サタンさんとルシフェルさんの方へ空中を移動する。二人の腕に収まった赤ん坊を診ているようなんだけど、サタンさん？ 足持つてひっくり返すのはどうかと思います。びっくりしたあたしは、つい攪うようにサタンさんから赤ん坊を引つたくつてしまう。

「何してるんです！ 可哀想じゃないですか！」

「いやこれがふつーの扱い方で、毎度の事だぜ。なあ？」

「そんな育て方をしてるから、終族の神子は毎回毎回粗野になるんですよ。偶には育児係を替えたら如何ですか」

「おー、そう来るか。しかしなあ、ウチの連中にはお前等ントコミたいな繊細な奴らなんかおらんしなあ……」

お酒をぐいーっと呑みながら彷徨うサタンさんの目が私で停止する。……超絶に嫌な予感がするんだけど。

「そか、だったら嬢ちゃん。アンタが育ててみねえか？」

「うそおおおおっ！」

うわやっぱりこつち来た！ 一族の未来を左右する子供を一介の女子学生に任せるなんて正気かつ！？

「何を考えているんですかサタン！ 今後も我等の行く末を左右するんですよ！」

そだそだ、もっと言ってやって下さい、ルシフェルさん。

「何言ってるんだルシフェル。偶には俺達の常識から離れた育て方をして貰えりゃあ、俺らの未来もまた違った明るいものになるってえ寸法よお」

「……成る程、そう言った捉え方もありますね」

うわー、論破されてどうするんですか。もっと食い下がったらどうなんですよ！？

「それに、普通の人間が此处まで神子に接していて何の影響も受けないと言つのは不自然です」

「そうだなア、さつきからそこが気になってたんだが。嬢ちゃん、
アンタ何モンだ？」

「ええと、たぶんふつーの人間かと思います、けど……。ん？」

腕の中で赤ん坊が身じろぎしたので見下ろしたあたしの視線と、
ぱつちり開いた黒瞳とがぴったり合う。無言無表情でキョトンとし
ていた終族の赤ん坊はにっこりと笑うと、背中の黒翼を広げてぶわ
つと風を巻き上げながら、あたしの腕の中から飛び上がった。

「おう、起きたか坊ン」

「此方も目覚めたようですね」

ルシフェルさんの腕からも金髪の赤ん坊が浮かび上がって滞空す
る。二人の頭上で合流した赤ん坊は、うー、とか、あぶー、とか言
いながら手を叩きあたしを指差す。いや、なんか会話みたいに見え
ているんだけど。ルシフェルさんの顔色が劇的に青ざめているんだ
けど。

「ぶっ……ぶわはははははははっ！ す、すげーぜ坊ン！ あっは
ははははははははははっ、ひーひー、ぶわはははははははは、は、腹痛エ
ッ、うわははははははははははっ……」

いきなりサタンさんが笑い出した。畳に転がって息も絶え絶えに
なつて尚、笑いが収まらないサタンさん。何がそんなに可笑しいん
だろう？ 逆に全身真っ白から真っ青に変色したルシフェルさん。
服まで変わるのか、器用ですね。

赤ん坊二人はあたしの方に飛んでくると、終族の子が頭の上に乗

つかつて、始族の子が膝の上にポテンと落ちてくる。着物の帯を掴むと「あーうー」と笑顔をあたしに向けてきた。

「ん？ 流石に言葉は通じないなあ。あ、こら！ キミは頭の上を這い回らないで！ 簪とかあるから危ないでしょ」

あ、そうだ。名前あるのかな？ 呼び名とかスンゴイ長かったりするのかな。あと服もないと裸じゃあ可哀想だよな。

「あの、この子達のな、……まえ……」

顔を上げたら目と鼻の先にお二人の顔が！ うわー近い近い！ 離れて、はーなーれーてえー！

「とりあえずハルカつつたか？ 最初に誤っておく、スマン」
「はいいい？」

「謝って済む問題ではありませんが、神子達が懐いているのでしたら育児係としては、申し分のない人材でしょう」

あたしの肩に両側からポンと手を置いて。なんとなく、昔の主治医の人が「最善を尽くします」と言ったシュチエーションそっくりだ。え？ ここあたし諦めるしかない場面？

「え、えーと、は、話が見えません……」

「なんでも坊ン達がお前さんを目覚めさせるのに神の種酒ソーマを飲ませたらしくてな」

「我等始族や終族よりも貴女の方が神子達に近い存在になっています」

「そ、そーまって何ですか？」

あたしの疑問に二人のお兄さんが顔を見合わせて頷く。答えてくれたのはニンマリとした笑みを浮かべたサタンさんだった。

「手っ取り早く言っちゃえば、……ハルカ、お前さんは不老不死になっただけだ」

[illegible]

変わりました（後書き）

とりあえず書きたい所までは書く事が出来たので、メインの活動に移ります。

また気が向いたらこちらは更新します。

1 紀元 || 1 億年程

閑話（前書き）

短い……。

閑話

「それでは柚木果狩家緊急会議を始めるとしましょう」

先代当主沙霧の発言により、その場に集合した一同に緊張が漂う。場所は本家の一室、四十畳ほどの和室だ。時刻は午後九時、集まったのは本家に連なる血筋の者達と、分家の代表格だ。

沙霧の隣にいるのは夫の栄蔵、六十八歳ながらも未だ若々しい外見を誇る明朗快活な本家のご意見番である。作務衣姿で腕を組み、皆の緊張感を煽るようにニヤリと笑う。二人の前には四畳分の間を空けて長女で現当主の胡桃。四十歳にもなると落ち着いた様子で静かに座している。その夫の和哉は少々落ち着きなく、先代と目を合わせないように視線をあちこちに動かす。後ろには娘が二人、父親の奇行に溜め息をついていた。胡桃夫妻の隣には彼女の弟で長男の隆文夫妻。その子供、男女二名未成年が背後に座っている。普段は本家より離れているので、隆文以外はガチガチに緊張しっぱなしだ。その列より更に後ろには分家の長達だ。残りは廊下側に面した障子を背に、本家内の使用人を束ねる壮年の男性と女性が控えている。現在集めるべき人員が揃っているのを確認した沙霧は頷いて会議、と言うよりは絶対の通達事項を話始める。

「知っている者もいるでしょうが、姉さんが目覚めました」

先代当主の姉と言う人物に対しては、この場の誰もがその存在を知っている。妙な過剰反応を見せたのは、今まさにその話を聞かされた柚木果狩家医療担当者、隆文だけだ。そんな馬鹿なと言った表情で母親に目を向ける。遥が病に倒れ、当時の当主は医療方面に手

を伸ばし始めた。それなりの成果を上げ、現在の医療関連に多大な貢献をしているが、それでも『遥の病に効く特效薬』の開発には至っていないと断言出来る。

「医療部門はそのままに。似たような症状は他にも確認されていますからね」

明らかにホツとした隆文の様子に苦笑する沙霧。

「……で、お前は遥ちゃんをどうするつもりなんだ？」

栄蔵が腕組みをして重々しい声を出す。長い付き合いの沙霧には夫が皆を緊張させて遊んでいると分かった。内心溜め息を吐きつつ、表情には出さないように話を続ける。

「不自由をさせてしまいましたが、暫くは姉さんを保護の方向で。敷地内より外には出さずに、此处のみで過ごして頂くと思っています」

眉をピクリとさせて渋い顔になる栄蔵。分家の長陣——子供の頃に彼女に世話になった事のある者達——から非難の視線が飛ぶ。保護と聞こえはいいが、この場合、沙霧が言っているのは、ていのいい軟禁である。皆の言いたい事が分かっている沙霧は、ざわつき始めた分家の者達を片手を上げて鎮める。

「現在姉さんを取り巻く情勢は非常に不安定です。つい最近現れたばかりの始族と終族との国交。実年齢に対してあの容姿を保ったままながら、滅びる事も出来なくなった事に本人がどこまで認識しているのやら。おまけに羽根の生えた赤ん坊が二人ですからね。外へ出すだけでどれだけの騒ぎになることか。誘拐や事故等になった場

合、彼等の報復がどれだけのモノか予測が尽きません」

一番問題なのは、遙が持つていて当人に一切自覚のない異能力だ。今となつては詳細を知り得るのが沙霧と栄蔵しかないが、迂闊に特定の場所で使われては国だけのみならず世界にも大混乱が広がるのは想像するだけで恐ろしい。しかも本人は自分を極々普通の一般人だとしか認識してないのだ。まだ普通に過ごしていた当時、二人がどれだけ諭してもあの異能力のせいで自覚させるまでに至らなかった。

「遙様に会うぶんには問題ないと言う事でしょうか？」

鞍町家の長（幼少期に遙に良く懐いていた）が手を上げて質問し、会うくらいであれば問題ないので許可を出す。その際には余計な事を口走らないように注意はしておく。更に湖桃の背後へ目を向け、視線を合わせた事で硬直した彼女を呼んだ。

「静流」

「は、はいっ！　なんでしょう先代様？」

まさかこんな大仰な場で自分に声が掛かるとは思っていなかったらしく、飛び上がらんばかりに驚く湖桃の次女、静流。年は十七、肩まで掛かるセミロングの黒髪を持ち、活発そうな印象を受ける。血の繋がりはあれど、柚木果狩家では世間一般の孫と祖母のような会話の場を持つことは難しい。

「貴女に姉さんの側仕えを命じます。貴女の間全てを使って仕えよとは言いません。時折空いている時間に姉さんの話し相手をして下さい」

「はい、不肖柚木果狩静流、そのお役目承りました」

背をピンと伸ばしてその場で深々とお辞儀をする。にっこり笑って満足そうに頷いた沙霧は「通達は以上です。皆、今から宜しく頼みますよ」と話を終わらせる。廊下側に座っていた使用人たちはそれを合図として障子を開いた。丁度そのタイミングで、部屋から見える夜空を切り裂くように、直ぐ近くを起点として一条の光線が斜めに進む。その場にいた者達がビックリして顎を落したり、右往左往して騒ぐ中、未だに光が立ち昇る離れから、しんとした夜氣によく通る悲鳴にも似た叱咤が聞こえてきた。

「ちよつとしーちゃん！？ ルシフェルさんの連絡先を聞いただけなのにいきなりレーザーをぶつ放さない！ しゅーちゃんも便乗しようとするんじゃないやありません！」

はつきりとこの場にいる皆に聞こえてきたのは、遙が赤ん坊を叱る声。相手が神にも等しい存在だと聞かされていても、遙の対応は極々一般的なものである。対する赤ん坊の所業には色々超越している所があるが。

ちなみに『しーちゃん』『しゅーちゃん』と言うのは赤ん坊二人の名前だ。犬や猫じゃないんだからと、非難が飛びそうだが、先方の意向もあってこうなった。なんでも「深い意味を持たせた名前だと、それに属性が引つ張られて変異するかもしれない」だそうなので。仕方なく会合の場で遙は、始族の赤ん坊を『しーちゃん』、終族の赤ん坊を『しゅーちゃん』と名付けた。始族代表のルシフェルは特に感慨も抱かなかったようだが、終族代表のサタンは爆笑していた。

遙には専属の使用人を二人付けてある。夕方前に聞いた報告によると、素っ裸ではみつともないから服を着せようと頑張っていたらしいが、二人とも嫌がって大変だったとか。結局、オムツだけを穿

かせるだけで遥は精も根も尽き果てたようだ。それでもあれだけの反応を見せられるくらいには回復したと言っのだろう。

「ははっ、変わらねえなあ遥ちゃんは……」

昔を懐かしむような顔で夜空にのびる光条を眺め、笑いを漏らす栄蔵。またあの頃の楽しい日々に戻るような気がした沙霧は夫と顔を見合わせて微笑んだ。

泣きました

はい、おはようございます。遙です。

会談から一夜明けました。沙霧、さーちゃんからは本家の端にある離れを今後あたしの部屋として使っていいそうです。うおー、マジか。ここ冷凍睡眠に入る前は御婆様の部屋だったんだよねー。超広いんだよここ、畳二十畳分もあるのよ。あたしとしーちゃんとしゅーちゃんと三人で使ってもまだまだ余白がいっぱいだ。

会談の終わる頃に名前を尋ねたら無いって言われたもんだから、「じゃあ、似合う名前をつけてもいいですか？」って聞いたんだ。でもそれはダメなんだって。

「ハルカ、それは出来れば遠慮して下さい」

「はあ、え？」

「坊ンたちはな、幼生の時は名前に影響を受けたりするんだよ」

「迂闊に何か深い意味を持つ名前をつけたりすると、根本的な性質から変異してしまい恐怖の大魔王になってしまう可能性があります。気軽な呼び名程度でしたら問題ありませんが……」

「……きょうふのだいまおうって……」

「過去に一度だけ二柱いっぺんに恐怖の大魔王になってしまった時があり、私達の世界は崩壊してしまいました。今のコチラ側の世界は何もかも一新しているのです。人の世まで同じにしくは無いでしょう？」

ルシフェルさんのこの説明のときだけはサタンさんも真摯な瞳であたしを見ていた。それが紛れもない真実だと分かったので、適当につけようか。あだ名みたいなものでいいよね？

「じゃあ、始族の子が『しーちゃん』でー、終族の子が『しゅーちゃん』！」

「……まんまですね。まあ、妥当なところでしょう」

「『しゅーちゃん』！？ 神にも等しいってのになんちゅー気さくな。ぶわははははっ！ 流石嬢ちゃん、一味違うなあ。うわははははははっ！」

キリツとした顔で淡々とした返事を返してくれるルシフェルさん。ここが学校であつたら黄色い声が大音声であがり、卒倒者が何人も出そうなイケメンっぷりである。サタンさんは畳をバンバン叩いてまたもや大爆笑だ。……どこに笑う要素があつたのかまったく持つて不明です。まあ、名前？ あだ名？ に許可が出たのでよしとしよう。

「御二方とも色々人族とは違う面もありますので、後日補佐が出来る者を派遣致しましょう」

「ああ、そーだな。ウチからも滅多に居ないが嬢ちゃんの補佐になりそうな者を探して送るぜ」

それでその日の会談は終了したんだけど。探しておくて事は、終族ってみんなサタンさんみたいに大雑把な人しか居ないんでしゅうか？

先ずはこの部屋に移る？ と言うか住む際に前のあたしの部屋（ずっと当時のまま残しておいてくれたそうで、感謝だよさーちゃん！）からタンスやら鏡台やらを移しました。でも洋服などは五十年の歳月に耐えられなかったので、後日色々揃えてくれるそうです。

後は生活用品が色々と。使用人さんも専属の人が二人付きました。
柚木果狩^{ウチ}の本家使用人は外部から雇うんではなくて、分家の末息子
や末娘が起用されます。分家のほうは自分達で済ませたり外から信
用できる者を雇ったりするらしいんですが。来たのはあたしより外
見が年上の女性の人が二人。

片方は長い黒髪を肩の辺りでまとめて、物静かそうな美人の鞍町^{くらまち}
？さん^{のぞむ}。昔あたしがよく面倒を見ていた鞍町潤ちゃんのお孫さん
らしい。もう一人が少し脱色した茶髪ばさばさショートカットで、
元気有り余っていそうなカッコいい美人の薬師寺^{やくしじ} 瀏華さん^{えんか}。この
人も昔面倒を見たことのある薬師寺蓉子ちゃんのお孫さんだ。二人
とも祖母から厳命されてあたしに付いてくれる様になったのだから、
あとで潤ちゃんと蓉子ちゃんにはお礼を言っておかないと。いや、
もう実年齢は兎も角、外見的に目上だから「ちゃん」付けはマズい
かな？

細かい部分はさておいて、問題なのは子供服なんですけど……。翌
朝、瀏華さんがひと揃え二組分、持ってきてくれました。早っ！？
それでももってあたしの左側の布団に二人で寝ていた片方、しーち
やんに肌掛けをポンと着せてみたのです。あ、翼ですか？ この子
たちの翼って色々と触れられたり触れられなかったりするようで、
服の類はすり抜けます。

抱き上げたらふにゅふにゅ言っていたしーちゃんと言うと。ぱ
つちり目を見開いた途端、ぎにゃ——っ！！！！？！！ と、泣
き出しました。

いや、どつちかと言うとあたしのほうが「ぎにゃあああああつ
！？」って感じでした。だっていきなり泣き出したしーちゃんを中
心として室内を大嵐が吹き荒れたんですよ。勿論あたしも吹っ飛ば
されましたし、瀏華さんも飛ばされました。離れの部屋を囲む障子

も飛ばされて、タンスも鏡台も宙を舞いました。パニックになったあたしは同じく爆風の中、目を回していた瀏華さんをひっ掴み、丁度けけら笑いながら大嵐の風の渦を楽しむしゅーちゃんを捕まえて、その子にお願いしました。「これなんとかしてえええっ！」って。お願いツツーか命令ツツーか悲鳴？ それを言った瞬間、爆風が不意に止み、宙を木の葉のように舞っていたあたしたちは重力に従い床に落下しました。まあ、しゅーちゃんが広げてくれた黒い翼にふわりと受け止められて、かすり傷も無かったんですけどねー。

しーちゃんに着せた肌掛けは、見るも無残なボロボロの布切れとなれ果てて部屋に散っていました。唯一飛ばされていなかったこの子たちの布団の上で「ふえ……」と、ぐずっていたしーちゃんを慌てて抱き上げてあやします。しゅーちゃんも覗き込むようにして、しーちゃんをなだめてくれます。

「ご、ごめんねー、しーちゃん。服、嫌いだったのー？」

「ぶー、あぶー」

「えううう」

相変わらずなんて話してるか分からないけど、慣れるしかないかー。一日二日じゃどうしようもないなー、意思疎通に関しては。その後服を見せるだけでそっぽを向くしーちゃんはダメだと思い知り、しゅーちゃんに拝み倒すようにしてなんとかオムツだけを穿かせる事に成功した。ここまでの所要時間五時間……。そしたら胸を張ってオムツを穿いた自分を見せびらかすような態度を取っていたしゅーちゃんに触発されたのか、しーちゃんもしぶしぶオムツを穿いてくれた。やったねあたし！ 苦労が報われたよ！ そしてご協力ありがとっ、瀏華さん、？さん。

「は、はあ……よ、かったあ……」

「ど、どういたしまして……」

その後専属の業者が呼ばれて、部屋が片付いたら夜になってました。

でも夕飯の時間になって、「赤ん坊のご飯はどうしますか？」と聞かれ、そう言えばその辺は聞かなかったなあと気が付いた。同時に疑問に思っただけど、あたしって目覚めてからろくに食事とつてないよね？ 夕飯の時間になるまで忘れてたよ。朝と昼の時間はそれどころじゃなかったし。

分らない時は専門家に聞いてみよう。サタンさんは適当な答えしか返ってきそうにないし、ルシフェルさんかな。でも連絡先を知らないや、しーちゃんはどうか？

「しーちゃん、しーちゃん。ルシフェルさんに連絡って取れないかな？」

「あぶー」

「えうー」

二人で布団の上に座り、対面になって掌を合わせるだけという意味不明な遊びできゃっきゃと笑っていたしーちゃんとしゅーちゃんが、あたしの方を不思議そうな顔で見上げて来る。

「ルシフェルさんに相談したい事があるんだけど、連絡の取り方で知らないかな？」

「ぶー！」

ビシッと右斜め上、たしか西の方。つまりはあちらの世界と空が割れて繋がっている方角、を指差したしーちゃんの指先がビカツと光った。そこからズバーっとペットボトル並みの太さの光線が離れの天井を突き破り、西の空へ伸びていく。突然の出来事にひっくり返って驚く瀏華さんと？さん。おいおい、今度は天井に穴かぁ。さーちゃんに怒られそうですね……。

「ちょっとしーちゃん！？ ルシフェルさんの連絡先を聞いただけなのにいきなりレーザーをぶっ放さない！ しーちゃんも便乗しようにするんじゃないやしません！」

同じく指先を空に向けたしゅーちゃんを押し留め、しーちゃんの手を止めさせました。

早く相談役が来ないかなあ……。

泣きました（後書き）

思っていたよりレギュラーが多い……。

初めまして・その2

翌日、テレビでは昨晚の夜空を横切ったっていう光に対して何も言ってませんでした。おそらく、取り上げることで国際問題？ 異世界国交に何か支障が出ると思ったんでしょう。「ネットでは色々な噂が飛び交っていましたよ」と？^{のそで}さんが教えてくれたんだけど。起点くらいは判明してるよね？ ソレすらも無いってことは柚木果狩^チの権力恐るべし！

というか今日で目覚めて四日目なんだよね……。なんという濃い三日間だったことが……。

一日の始まりは^{えんか}渌華さんが用意してくれた浴衣に着替えてから、しーちゃんとしゅーちゃんのオムツを変える。家の中では基本的に着物が浴衣です。特に絵柄も無い紺のグラデーシオンだけの浴衣。渌華さんたちは黒か紺一色の洋服、長袖スカート付き一体型。赤ん坊二人はオムツのみ……。うん、洋服を着せるのはまだ先なんだ。流石のしゅーちゃんもオムツは妥協してくれるんだけど、服までは嫌がるんだよね。もしこのまま外に出ても色々とおかしそうですね……。

でも昼前に、さーちゃんと話す時間があつただけだ。柚木果狩家の敷地からは出られない、……。らしいんだわこれが。基本は外部の悪質な考えを持つ人たちから赤ん坊二人を守るためと、世間知らずなあたしが外に出るのがまだ早いってことらしい。うん、まあ、五十年後の世界って良く分からないけどね。初日に料亭まで行く道で見た外の風景は、冷凍睡眠に入る前とそんなに変わっていない印象だったけど。多分外に出るにはしーちゃんとしゅーちゃんもセ

ツトになるから、二人に服を着せるといふ任務をクリアしないと出られないね。オムツだけの赤ん坊なんて人の目に晒せないし。

「いえ、姉さん。問題はそこではないんですが……」

「そうなの？　じゃあ誘拐とか身代金とかの問題？　むしろ誘拐とか実行に移す人が可哀想かも」

先日のレーザーとか室内で吹き荒れた大嵐を見るとね！。あれが対人に向けられるとか洒落じゃ済まないような気がするよ。あたしの膝枕でぷうぷう寝ている翼の生えた赤ん坊二人の頭を優しく撫でていると、さーちゃんは頭を抱えた。

「じゃ、もうそれでいいです……」

「さーちゃん大丈夫？　コメカミをほぐしたりしてるけど、この部屋で寝ていく？」

「いえ、まだ娘に伝ええないといけないことが多いので。とても心惹かれるお誘いですが遠慮致します」

「そお？　じゃ、暇になつたらいつでもおいで」

「その時はぜひ。では失礼します」

さーちゃんが一礼して出て行くと、部屋の端でカチコチになったまま並んで座っていた渚華さんと？さんが「ぶはー」と息を吐いて肩を落とす。さーちゃんが来たとき慌てて部屋に駆け込んだんだよね。「せせ、せ、先代様がいらつしやいましたー」とかどもりながら。恐怖政治でも敷いていたのかな？

「こ、ここに、怖かった……あ……」

「先代様は礼儀作法に厳しい方ですから、前に出ると緊張しますね」「そうかな？　さーちゃんは節度と礼儀を心得ていれば文句は言わないよ。まあ、昔からあたしには何にも言わなかったけど」

忠告みたいな事はよく言われたけどね。「姉さんは当主様とお戯れ過ぎです」とか「近すぎているのを不満に持つ者もいるんですよ」とか。真つ赤な顔して怒っていたけど、特に嫌がらせみたいなのは無かったかなあ。

「遙様、鬼ですか……………」

「絶対、先代様好意持ってたよね、それ……………」

「ん？ 姉妹仲は良かったと自負している！」

「「先代様も大変だったんだね……………」」

遠い目をしてるし、へんな事は言っていないよね？

今の季節は秋の終わり、冬の入り口つてところかな。なんとなく感覚が鈍ったみたいで、？さんに「風が冷たくなりましたね」とか言われても、特にそうとは思わない。これも不老不死になった影響なのかな？

日差しが暖かそうなので、縁側にタオルケットを敷いてしーちゃんたちと一緒に日向ぼっこ。本家南側の庭は、大きな池や見事な植木が多くて凄く壮観な光景が広がっている。昔ちよつと庭師さんにツツジの刈り込みとかをやらせてもらったことがあったんだけど、全部同じ形になって庭師さんと御婆様が困惑してたなあ。

しゅーちゃんは黒い翼を広げてタオルケットの上に腹這いになって「くうくう」と寝ている。寝顔は天使のようだ。色は黒いけど。可愛いし、美人さんだし、保護欲がかきたてられるなあ。しーちゃんは縁側に座るあたしに寄り掛かってお昼寝中。こっちもブロンドがお日様にキラキラ輝いて超美人！ 白い翼は小さくなっている、あたしの左右に突き出し、風になびいている。うーん、こっちも可愛い。自然と頬が緩むなあ。ニマニマよ、ニマニマ。

柚木果狩家の敷地から出るのを禁止されたけど、元々あたしの行動半径は狭いから特に不自由はしていない。この本家は小高い丘の頂上に建っていて、そこから麓まで参道状に階段が繋がっている。参道の左右にはそれぞれの分家が建っていて、下から上がってくる者は三箇所の分家がそれぞれ管理する大門を潜らなければ本家まで辿り着けないようになってるんだよねー。あたしは顔パスで通れるけど、麓で薬師寺家の管理する壱の門は通れないという事だね。貳の門は鞍町家、参の門は献笙家が管理をしている……ハズ。階段の途中には一族の者限定で売ってくれる和菓子屋さんとか、着物屋さんとかあるしね。丘の裏手は散策道が広がっている。赤ん坊の世話に専念していると、ロクに出かけられるコトが出来るのか疑問だし。

空を見上げて雲を眺めながらゆっくりと過ぎる時間を楽しんでいると、？さんがやってきた。お茶と最中が載ったお皿を、あたしの邪魔にならない所に置いてくれる。

「ありがとうございます」

「どう致しまして。それとお目通りにになりたいという方が見えています、如何なさいますか？」

「ん？ 蓉子ちゃんや、潤ちゃんですか？」

「いえ、祖母ではなく、本家の方です」

「ん？ さーちゃん以外だと栄蔵兄さんくらいしか知らないんで

すが、会いましょう」

「分かりました。しばし、お待ち下さい」

足音も立てずに静かにこの場を去る？さんを見送ってしばらくすると、本屋敷からの渡り廊下を通って見た目同じ位の年の女の子がやって来た。薄い青地に黄色いアクセントを加えたブレザーの制服を着ている。髪はセミロングで、快活そうな表情と強い意志の瞳を持っていた。あたしより五メートルほど離れた床に、静かに座り、その場で手について深々とお辞儀をする。

「初めまして、先代様の姉上殿。私は先代様の娘、湖桃こももが次女、柚木果狩静流しずると申します。先代様に貴女様の側で仕えよと、命じられました。なにとぞ宜しくお願い致します」

えーとその”先代様の姉上”って呼称はややこしいな。姉妹の孫だから……又姪？　つか、本家の次女をあたしの側仕えにしているのか？　ここまで腰が低いなんて声を掛けたらいいのか分からないなあ。……どうしょ？

初めまして・その2（後書き）

決めたノルマまで連投予定です。

丁寧語は結構適当、雰囲気だけ感じてもらえれば、です。

困らせよう

いくら『先代の姉』だからといってそこまでかしこまる必要はないと思うんだ。そもそも、あたしは人生経験少ない小娘だし。見た目若い年くらいの人に敬語使われてるって背中が痒くなるわ。なので、頭を上げて貰い、「普通に気さくな感じで良いよ」って言いました。まあ、「そんなとんでもないです」と両手を振って断られましたが……。

「同じ本家者なんだし、差し引きゼロでいこう」

「恐れ多いです。先代様の姉上殿に対して」

「そんな仰々しい呼び方じゃなくて、名前で良いよ？ 遥って」

「目上の方にそのようなこと言えません」

おおう、結構強情？ 「いや、当たり前じゃないかなー」みたいな苦笑顔で側に控えている渚華さん。実年齢だけの目上なのに敬意を払われても困るよ。こうなりやトップと直談判だ。

「？さーん、内線ってありますー？」

「あ、はい。これですね。どうぞ」

両手で恭しく差し出された板つきれみたいなのを見たあたしの目は点になった。

「なにこれ？」

「内線電話です」

形は長さ半分になった割り箸程度の大きさ。上下の端に点々と小

さな穴が付いているだけの代物でした。「どなたにお掛けですか？」と聞かれたんで、「さーちゃんに」と返す。

「それでしたら使い方をお教え致しましょう。まず側面の小さい出っ張りを押しましてですね」

「あ、なんか表面に縦並びで、青い光の数字が浮かんできた」

「ここに番号を打ち込みます。先代様の仕事部屋でしたら『1001』ですね。どちらかが無言五秒でいれば勝手に切れますので。はい、どうぞ」

うわあい、電話の小型化が進んでるなあ。こんな薄っぺらくなってるとは思わなかったよ。あたしのお腹に寄りかかるしーちゃんを左手だけで支え、小さな内線の受話器を右手に持つ。やや、ざわついていたからか、しゅーちゃんの黒翼がバサリと動き、そのそよ風を受けたしーちゃんが身動きをし始めた。

「あちゃー、起きちゃった……」

『……姉さん？』

受話器の向こう側から訝しげなさーちゃんの声が聞こえてきた。まあ、手っ取り早く済ませよう。

「さーちゃんのお孫さんが挨拶に来たんだけどー」

『静流が何か粗相でも？』

うわあー、声が怖い怖い。

「いやいやいや、礼儀正しいよ。良い子だよ。でも見た目同じ年くらいなんだから、名前で呼んで貰いたいんだよねー」

『姉さん。目上の者に礼儀を弁わきまえている、当たり前ではありません

か。貴女も本家の者なのですから、家のしきたりには慣れて頂きますよ。昔も何度か言いましたか」

おうふ、さーちゃんの方が何倍も頑なだったかも。うーん、じゃあ仕方がないから最後の手段。

「分かりました」

『おや、姉さんにしては物分かりがいいですね？』

「申し訳ありませんでした」

『……はい？』

「先代様の貴重なお時間を、私の些末な悩み事をお聞かせすることにあててしまい、自分の行動を恥じるばかりです」

『い、いえ、姉さんが畏まる必要はないんですよ？』

「いえ、今からでもキチンと線引きをして、先代様にも敬意を払うべきですよ。では時間を無駄にしてしまうので、失礼致します」

『姉さんっ！？』

話す側の穴を押さえて受話器を遠くに離す。さーちゃんが弁明している声が聞こえてきたけど、すぐ静かになった。うん、切れた切れた。便利な世の中になったねえ。さーちゃんの弁明が聞こえていたらしい、引きつった顔の？さんに受話器を返して、静琉ちゃんを部屋の中へ招待する。あたしが立ち上がるより早く、翼をはためかせたしゅーちゃんが縁側の屋根下付近まで飛び上がる。あ、ほっぺにタオルケットのシワ痕が付いてるわ。しーちゃんはあたしの腕の中でまだこっくりこっくりと舟を漕いでいた。床のタオルケットを拾ったあたしの頭上に、しゅーちゃんは乗る。ううむ、怒るべきか叱るべきか、悩むなあ。胸にしーちゃん、頭にしゅーちゃんて टीमポールの支柱か、あたしゃあ……。

「座布団座布団」と呟くあたしに洵華さんが座布団を三つ渡して

くれる。上座にひとつ置いて、静流ちゃんにひとつ勧めて、あたしはその対面に。胸に抱くしーちゃんの白い翼があたしの左右に広げられ、頭に乗るしゅーちゃんの黒い翼が肩口に垂れ下がっているけれど。なんか新種のモンスターになった気分です。怯えた顔で私の前に座る静流ちゃん、怒られるんじゃないかと思っているみたいだね。

遠くからトタトタターっと小走りっぽい足音が聞こえてきて、障子がスパアアン！と開けられた。必死の形相で障子を開け放ったさーちゃんを見た洊華さん、？さん、静流ちゃんがびびりまくって硬直する。コレだけ騒がしい状況にしゅーちゃんは再び寝入ってしまった。……あたしの頭の上で。逆にしーちゃんがぱっちり目を覚まして、「あぶう」と大あくびをする。それでも私の膝の上から動こうとせずに、初めて見る人（静流ちゃんのことね）をまじまじと見上げていた。

「ね、姉さん！ なんですかさっきの態度は！？」

「まあ、先代様。落ち着いて下さいまし。さあ、上座にでも座って皆の前なのでから」

あたしがきつちりとした姿勢で上座に置いた座布団を勧めると、立ちくらみでも起こしたようにふらふらと廊下に座り込んだ。「先代様！？」と血相を変えた洊華さんたちが慌てて肩を支える。静流ちゃんは突然起きた不測の事態に対応できないまま、「あわわわわ」とかうろたえていた。

「お疲れなんでしょう。？さん、お布団を敷いて下さい。先代様には休息が必要のようですよ」

「い、いいえ、姉さん。私にまでそんな他人行儀止めてください」
「大丈夫ですよ、今後は礼儀を弁えて、キツチリと線引きを致しま

す。先代様にも無礼の無いように……」

「ね、ねえさあああん……」

ポロツと涙を零したさーちゃんにその場に居た一堂がギョツとなる。いかん、ちよつとふざけすぎたか？ あたしの懷から飛び立ったしーちゃんの代わりに、さーちゃんを抱きしめて頭を撫でてあげる。ううん、白髪が増えてきたねー。ウチ一割くらいは確実にあたしのせいだよな。

「うう、酷いですー」

「ああああ、ごめんねごめんね」

ほんわか状態のあたしたちとは別に、三人が石化しているんだけど。ま、いつか。なんとかなだめて落ち着かせて、威厳のある先代様に戻らせて。静流ちゃんが気さくな態度を取ってくれないんだよ。って説明をしたら、咳払いをしたさーちゃんは「いいでしょう」と許可を出した。

「え？」

「静流、貴女には姉さんの名前を呼ぶことを許します。本人も望んでいることですし、またこのようなことがあると、私も精神的に痛みを負いますので」

「よしオツケー！　じゃあ静流ちゃん、今度からはあたしのこと遥って呼んでねー」

「ええええええええっ！？」

「それと姉さん」

「ん？」

「赤ん坊にアレはまずいのでは？」

「は？」

さーちゃんの促した方を見ると、いつの間にか起きていたしゅーちゃん（どうりで頭が軽いと思った）が、しーちゃんと最中の乗った皿を挟んで座り、「食ってみる？」「いいね、食おうか」みたいな雰囲気をもし出している光景でした。

「ってこらあああつ、二人ともーっ！ 最中なんか食べたらダメエエエエエエッ！」

慌てて皿をかつさらったのは言うまでもありません。

困らせよう(後書き)

毎日連載って難しいです。
ちよっとギブアップ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6690t/>

始まりと終わりの子守唄

2011年10月18日12時59分発行